

## 日韓「ハンセン病詩」管見

森田 進

はじめに

二〇〇二年八月から、世界で初めて『ハンセン病文学全集』（皓星社）が刊行されはじめた。編集委員は、大岡信（詩人）、大谷藤郎（ハンセン病支援団体藤楓会会長）、加賀乙彦（作家）、鶴見俊輔（評論家）である。これは、第一期全十巻で構成される。作品は、児童作品、評論・評伝、詩、短歌、俳句、川柳と多岐に亘っている。皓星社のパンフによれば、「質量ともに世界文学史上例を見ないハンセン病文学の集大成」とある。

では、この「例を見ない」とはどういうことなのか、たとえば、編集者の一人、大谷藤郎が的確に答えている。「非条理に基本的人権を奪われて、抑圧された極限状態に置かれてしまったが故に、むしろ普遍的な人間性を表現しているのではないかということ、世界に例を見ない日本のハンセン病隔離という誤った人権侵害の歴史の中に閉じ込められた一群の人々によって、生み出された疎外、抵抗、絶望、人間回復などの諸側面、人間が人間であるための諸条件につきあたり、迷い、できあがって残されてきた作品である」。

すなわち、日本の「世界に例を見ない」強制隔離政策が、作品を生みだした大きな要因であったのである。むしろこれだけが原因ではあるまい。人間が本来的に備えている表現への内的欲求の突き上げも大きい。

ハンセン病者の芸術表現は多岐に亘っているが、書画、園芸、手工芸、陶芸、彫刻、音楽、文学などに優れている。

わたしの関心はたまたま文学、とくに詩歌であるが、具体的に関わっているのは、詩である。一九三〇年（昭和初期）代以来、日本のハンセン病者の文学活動は絶えることなく続いているが、二十一世紀に入った現在、全国の平均年齢が七十五歳を越えていて、肉体的に限界に近づいているのである。詩歌の創作者の人数も急速に減少しているものの、作品の質に衰えは見られず、むしろ深化を見せていると言える。絶望と死からの復活の文学として、生命の尊厳と輝きの表現を確実に手に入れていると言えるだろう。

### 一、小<sup>ソロクト</sup>鹿島（韓国）

さて、今回の関心は、隣国の韓国のハンセン病者の文学表現にある。韓国のハンセン病療養所施設の嚆矢は、一九一六（大正五）二月に開設された小鹿島（ソロクト）慈恵医院であるが、これは日帝植民地時代の朝鮮総督府が、ハンセン病専門の療養所として全羅南道の小鹿島に建てたのである。興味深いのは、日本のどの国立ハンセン病療養所よりも創立が古いという事実である。これには、日本国内で、強制隔離収容をめぐる意見の統制が難しかったという背景がある。ただし小鹿島慈恵医院は、当初道立であった。

その後 一九四五年の解放以後、韓国は、ハンセン病政策において、日本とは異なった独自の道を開拓したのであった。解放後、とくに一九五〇年代から、韓国は、「定着村」政策を推進した。これはハンセン病者の経済的自立を図る村である。現在、九十数カ所ある。出発時は、おもに農業であったが、漁業、林業もあり、現在は、商業、手工業にも進出している村もある。日本との根本的な相違点は、第一に、家族同居の共同体であり、外界との境界線がなく、行動の自由が保障されている。が、経済的自立の確立は、現実には想像を絶する厳しさであったらしい。

第二に、国家による強制隔離政策を経験しなかったが故に、ハンセン病に対する国家賠償請求が運動体としては、全国レベルで展開されなかった事実がある。

私は、韓国の定着村を十数箇所訪れたが、自立村であつて、ハンセン病療養所ではないという基本的な違いが、医療施設に関して、目に見える相違点となつて現れている。

さて、小鹿島病院であるが、院内の資料館には、芸術作品があまり見られない。

文学に関しては、韓国文学史上で高い評価を受けたハンセン病者の詩作品を、私はほとんど知らない。

手元の資料に拠れば、一九三九年、日本植民地支配のもつとも苛酷な時代、小鹿島の拡張が行われた。

その時、李東<sup>イドン</sup>という篤実なキリスト教信者の青年がいて、多くの入園者から尊敬されていた。ある日、労働現場の採土作業に従事していたが、邪魔な松の木二株を移植せよという佐藤看護長に命令されたが、療友が倒れたので、背負つて治療室に運び込んで、命令をすっかり忘れてしまった。翌日、採土場に出頭したが、佐藤は、李を突き倒して靴先で首を踏みつけ、「おまえの命は、あの松よりも劣る」と言つて、監獄室に送つた。出獄した日、処罰としての外科手術台の上で、断腸の思いで、李は詩一編を詠みながら、蕭然と優性手術のメスを待った。

昔 わたしが思春期に夢見た

愛あふれる夢は潰えて

ここにわたしの二十五歳の若さを

滅ぼそうとする手術台の上で

わたしの青春を慟哭しながら横たわっている

ずっと孫が見たいと言つていた母の姿……

手術台の上にくっすら見える  
精管を断ち切る冷たいメスが  
わたしの局部に触れる時……  
砂粒のように地に増えよと言った  
神の摂理に逆らうメスを見て  
地下のヒポクラテスは  
今日も慟哭する

① (森田進訳)

この李東のその後については、もともと李東は詩人ではないので、詩史には姿を現さない。

さて、小鹿島病院五十周年記念行事が一九六六年五月十七日に開催されて、記念碑が治療本館前に建てられ、碑の裏側に、詩人・韓何雲（ハン・ハウン）の祝詩が刻まれた。

ああ 五十年

〈小鹿島病院五十周年記念に〉

天刑の島には

納骨堂が確かな答

かならず「ライは直る」という神話が

恵み深い山河にも吹いている

しぶとく生きてきた命たちが

今 新しい天地を探す

輝かしい悲しみの小鹿島

ああ 五十年

解放

自由がある

ああ 新しい世界

②

(森田進訳)

「天刑」は、現在あきらかに差別語であるが、文学作品なのでそのままにしてある。また、一九六六年当時、日韓共に、ハンセン病という学問的、医学的専門用語は、とうに成立していたが、一般的には、「らい病」であった。韓国では、「ムンドンイ」であり、原詩は、「ムンドンイ」を使っているので、訳語に苦勞するが、ここでは、訳語を「ライ」と表記した。

この詩は、どのように解釈したらよいのか、しばらくたじろいでしまう部分がある。「天刑」とか「神話」という名詞に詩人がいかなる意味を込めているのか、複雑な心理が影を落としているようである。が、詩の主題は明確であり、解放と自由である。

## 二、韓何雲とハンセン病

韓何雲は、韓国詩史上、重要な位置を占めている詩人である。ここで、詩人の簡単な履歴を『韓国詩大事典』（乙支出版公社、一九八八年、金永三編著）から抜き書きしてみる。

韓何雲（ハン・ハウン）一九二〇年三月三〇日～一九七五年二月二八日。一説には一九一九年二月二四日ともいう。本名は泰永。現在の朝鮮人民共和国の咸鏡南道咸州郡東川面に生まれる。中国の北京大学卒業。帰国後、咸鏡南道、京畿道の道庁などに勤務する。ライ再発のため郷里で治療したが、共産主義支配体制から逃れるために南下（四八）して、一時放浪生活をする。

詩は、「全羅道への道」など十三編が、李秉哲の選によって『新天地』（四九年）四月号に発表された。ハンセン病による呪詛と悲痛を描いた作品が文壇の注目を浴びる。まもなく『韓何雲詩抄』（正音社、四九年）を上梓した。三十九年日本の成蹊高校留学時代に北原白秋、石川啄木から影響を受けた。六・二五動乱（朝鮮戦争）後、国立成鷄島院総務、新明保育園長（五二）、青雲保育園長（五八）、出版社無何文化社代表（六〇）、安平農場長（六三）、新安農業技術学校長（六六）、韓国社会復帰協会長（六六）などを歴任する。ライも完治して、肝臓炎になり、他界した。著書は、第一詩集に続いて、第二詩集『麦笛』（人間社、五五）、『韓何雲詩全集』（五六）、自叙伝『私の悲しい半生記』（五八）、自作詩解説集『黄土の道』（新興社、六〇）、『定本 韓何雲詩集』（無何文化社、六四）、などを残して、死後に彼に関する本『麦笛』（三中堂、七五）、『韓何雲の名詩』（韓林社、七九）、『行けども行けども黄土の道』（知友社、八三）などがある。

韓何雲は、一九三三年、体がむくみはじめ、三六年、十七歳、京城帝国大学付属病院（現、ソウル大医学部附属病院）の診断により、ハンセン病と確定されたのであった。少年の絶望の深さはいかばかりであったろう。

### 三、韓何雲の詩の世界

1、ライ者の心の代弁者と民謡調  
では、韓何雲の代表的な作品を詠んでいくことにする。

#### 全羅道への道

小鹿島へ行く途中で

行っても行っても赤くて黄色い道

息が詰まるような暑さだ

馴染みのない友に会えば

ライ者同士はなつかしい

天安<sup>チョサン</sup>三叉路を通り越しても

ヘチマのような夕日は西の山に残っている

行っても行っても赤くて黄色い道

息が詰まるような暑さの中足引きずりながら行く道

履き物を脱ぐ

柳の木の下で地下足袋を脱ぐと

足の指がまた一本ない

これから残った二本の指がもげるまで

行っても行っても千里も遠い全羅道への道

(森田進訳)

一九四七年、韓何雲は、「北傀転覆義挙」事件で入獄していた元山刑務所を脱獄に成功して、三八度線を越えて南下、放浪、再び帰郷したが、弟も恋人も行方不明となる。四八年、離郷して、南へ。四九年、「全羅道への道」が発表されているので、この作品は、四七、四八年に書かれたものだろう。北から南へ、放浪生活であり、逃亡であり、亡命でもある旅を描いている。「天安」は、忠清北道の重要な都市であり、おそらく南に入った何雲が、天安を通り越して、忠清南道の大田、そして全羅南道の光州を経て小鹿島へと辿っていく気が遠くなるような旅の途中を書いているのだ。日本のハンセン病者の入園までの道のりを描いた詩も多数あるが、韓何雲の場合、南北分断という歴史的悲劇の当事者である。

では、小鹿島療養所の石に刻まれた作品を紹介する。

麦笛

麦笛 吹き吹き



春の丘

ふるさと恋し

ぴい ひよろろ

麦笛 吹き吹き

花の山

幼な夢さえ

ぴい ひよろろ

麦笛 吹き吹き

往き交いの

人の世恋し

ぴい ひよろろ

さすらう雲の

幾山河

涙の丘越え

ぴい ひよろろ

③

(金素雲訳)

多くの訳があるが、金素雲の訳は、原作のもっている素朴な民謡調を大切に、病気を超越しているかのようなのどかな世界を見せてくれる。この技法に拠って、病気の悲しみが静かに深く染み込んでくる。この詩は、何雲個人の悲しみを奥深く静めながら、当時のすべてのライ者の心を代弁している。当時の患者たちの望郷の激しさをなんとみごとな歌として形象化していることだろう。だから小鹿島に詩碑が建てられたのであろう。

姜晶中（詩人）は、韓何雲について、「ハンセン氏病におかされ悲痛な運命にさいなまれながらも、歌うことに生きる尊さを見出し出していった。詩の節々に悲哀の情がしみいつてはいても、けっして湿っぽいところをみせず、明るく誰もがすぐ口ずさめるように歌っていて、なお心をうつものを残す。民謡調のリズムはまさに情感を寄せ合える慰めの拠り所であり、詩人の言葉は自然の草や雲、蛙などの声とまったく同質の次元に置かれた。そして詩人の姿は作品に見られるように麦畑をよぎっていった一片の雲の影だったのだ。その影が今も私の耳元に麦笛の音となって彼方から鳴り渡ってくる。」④

韓何雲の「何雲」は、病苦を背負った生の漂白から浮き雲のようなあてどのなさを連想しがちであるが、それはおそらく間違いであって、姜晶中の解釈のほうが信用できる。日本の詩で言えば、山村暮鳥の詩集『雲』のおおらかさ、素朴、無垢とむしろ通い合うものがある。韓何雲にとって、詩は実人生の痛苦を解き放ってくれる魔法の玉手箱であると同時に、実人生に戻っていく勇気を与えてくれる不思議な快樂なのである。

韓何雲は、魔法の玉手箱の中にそっと、じつは激しい告白を閉じ込めている。じっくり読んでみると、韓何雲を切り苛んでいるものの実体が「罪と罰の意識」であることが明確に浮かびあがってくる。詩の技法上は、口当たりの良いリズムに乗せているので、読み手はさらっと読み流してしまいがちなのだが、これは、詩人の意図的な戦略

であって、ほんとうに共感してくれる読み手を求めている恋文のような告白なのである。

## 2、東アジア的「罪と罰」から

### 罰

罪名はライ

これは まったく とんでもない罰でございます

どんな法律の どの条項にもない

私の罪を弁護するすべもございません

むかしから

人間のおかした罪は

人間として 罰を受けることになっているのです

だのに 私は

誰もいない この空の外に ひとり 置き去りにされ

罪名はライ

これは まったく とんでもない罰でございます

この「罪と罰の意識」は、二千年以上前からあったものであり、旧約聖書にもはっきり見られるのであるが、東洋においては、仏教的な「業」や「輪廻」の観念とも結びついていったようである。韓何雲の場合には、晩年にはカトリックへと接近して、死の直前に受洗しているが、晩年、東アジア的な「罪と罰」の世界から、どのような思想的変遷を経て、キリスト教的な「罪と赦し」へ導かれたについては、現在、詳細な研究は進んでいないようである。

少なくとも韓何雲自身は、まったくの不条理として一方的に決定されてしまった自分の運命を承認できず、しかも罰され続ける運命を怒って、ついに激しい自己否定に駆り立てられ、またその反動として、絶望的なまでの希望や夢想にも駆り立てられるのであった。そこから人間回復への宣言とも祈りとも言ってもよい詩が立ち上がってくるのである。

### 3、希望

韓何雲の時代の限界というものを、ここで考えざるをえない。医学的事実においても「ライは直る」時代に突入してはいたが、現実の医療体制から言えば、屍を焼く煙は立ち上り続けていたのであり、納骨堂の棚は増えていたのである。その状況の中で、韓何雲の苦闘は続き、「ライの否定」、「健康」、「再生」を、つまり生の希望を魔法の玉手箱を開いて手に入れようとしたのである。

私はらい患者ではありません

父がらい患者であります

母がらい患者であります

私はらい患者の子供であります

しかし ほんとはらい患者ではありません。

天と地の間で

花と蝶が

太陽と星をだました愛が

生命となったのであります。

世間はこの生命を悲しんで

人間である私をらい患者と呼びます。

戸籍もなく

噛みなおしても判りようがなく

健康な人間になろうとしてもなれそうもなく

呆れ果てた人間なのであります。

私はらい患者ではありません

私はほんとにらい患者ではなく

健康な人間なのであります。

⑥ (中原誠訳)

北条民雄の『いのちの初夜』にもびったりと呼応する生命認識は、ライそのものを受容しきったところに出現する。それは、生命そのもの実感なのである。

命

ゴミ箱と

並んで坐って

夜を明かす。

瞬き一つする間にも

命の終る思い。

瞬き一つする間にも

まだ生きてる命の ピクリとする手応え。

臍の下に手をやれば

三十七度の体温が

一匹の腐れ魚のようにグニヤリと手に触わる。

一つっきりの命

私のいとしい命よ

未だにお前は星のように　ピカリと輝いてござっしやるのか。

⑦　（金素雲訳）

ここで、再生願望を歌った歌を紹介する。作者がライ者である事実は、ほぼ匿名化されて、青春特有の情念を形象した歌曲として膾炙している。

青い鳥

私　私は

死んで

青い鳥になって

青い空

青い原っぱを

飛びまわりながら

青い歌

青い鳴き声で

思いつきりさえするだろう

私 私は

死んで

青い鳥になるだろう

(森田進訳)

ハンセン病に対する国家賠償が決定した日本の中で、日本のハンセン病の文学が再評価されつつある状況にあつて、植民地時代に、ハンセン病の歴史を共有してきたので、韓国ハンセン病史を研究する責任は、まず日本側にある。が、だからといって、韓何雲の詩が、今、日本の研究史上、とくに注目されているわけではないが、日韓ハンセン病文学史の比較研究上、もつとも重要な詩人としてかならず再評価されるだろう。

#### 四、韓何雲以後

現在、韓国側も資料不足のため、韓何雲以後のハンセン病の詩の研究は、あまり進んでいないようである。韓何雲の主題を引き継ぎ、深化していった詩史上貴重な詩人がいたのか否か。韓国側からの連絡待ちである。

#### 五、日本のハンセン病の詩との比較

ここまで、私は、じつは躊躇してきた問題がある。それは、「ハンセン病文学」なのか、「ライ文学」なのか、である。私は、「ライ文学」という名称を取る立場にいるが、誤解を避けるため、あえて「ハンセン病文学」と記す



ことにしている。

さて、日韓ハンセン病文学（散文と韻文）は、ともにハンセン病患者（元患者を含む）によるハンセン病に関する素材に基づいた文学作品を意味する。

文学現象から見えていくと、圧倒的に日本の方が量が多い。基本的に日本人の方が、日記を含めて自己体験の記録化（文字化を通した再認識）が歴史的に身についていることを第一に指摘できる。詩歌に限って言えば、日本には、伝統文学としての俳句、短歌があり、しかもこの伝統的詩歌の表現営為には、何十万人もが携わっていて、世界の詩の国なのである。ハンセン病者に優れた俳人、歌人が多いのもうなずける。この伝統詩歌は、日本人の肉体に染み込んだ五、七音の韻律をもっており、しかも世界一短い形式である。芸術表現において、形式と内容は、密接な呼応関係にある。俳句と短歌というほぼ完成された形式の中に、患者は自己表現の内実を注ぎ込みやすかつたのである。⑧

これに比べて、韓国には伝統的詩歌と云えば、時調があるが、これはいわば韻を踏む漢詩の伝統の延長にあるので、時調の創作は難しいといえる。その点では、口語自由詩は親しみやすいといえるのだが、近代、現代詩は、知識人の側に独占されてきたといえるだろう。このため、韓国では、民謡的なリズムに乗せられた詩が好まれるのであり、韓何雲の詩が、病者の心を代弁できたのである。

第二には、冒頭部分で記したが、日本の強制隔離政策と韓国の定着村という自由保障の生活方式の違いが、表現への内的必然の欲求の相違となって現れていることを指摘できる。『ハンセン病文学全集』が刊行され、しかも世界に例を見ないという点に日本側の特色が挙げられる。療養所の中で、多くの文化活動が行政からも奨励されたが、患者の側からも自主的な表現活動が展開されてきた。この場合限られた同一空間を共有していることは、相互の芸術的な切磋琢磨にもなったのである。もうひとつ、指摘しておくべき重要な事実がある。それは、非ライの側から、つまり療養所の外側からの熱い支援がほぼ表現活動の歴史とともにあったという事実である。北条民雄の理

解者としての川端康成はあまりにも有名であるが、日本各地の療養所の文学活動を各地の俳人、歌人、詩人たちが、添削、批評、創作を通して具体的に関わってきたのである。さらに、文学者以外の多くの文化人達の熱い支持もあり、ライ予防法反対闘争支援そして国民へのハンセン病啓蒙運動を通して関わって来た事実も指摘しておきたい。

第三に、日韓ともに高齢化が進み、現在、作品数が激減している。

次に、作品内容について分析していくと、日韓ともに、「激しい望郷、家族、闘病」の主題が圧倒的である。作品の文学的価値については、ごく一部を除いて、まともに論じられてこなかったのが事実である。そもそも「ハンセン病文学（ライ文学）」という定義も確立していないのであり、一個の独立したジャンルとして成立するのか否か、まともに論議もされていない。私は、定義は必要であり、ジャンルは成立しているという立場にいる。この件については、日韓が共同研究を進めるほうがよいだろう。

#### 六、在日の詩人たち

日韓ハンセン病の詩を研究していくにあたって、在日のハンセン病患者の詩をどのように位置付けていくかも課題である。

最後になったが、ここでは、二人の詩人を紹介する。

大岡信は、『ハンセン病文学全集』のパンフで、「短歌なら明石海人、津田治子、伊藤保、俳句なら村越化石、詩なら塔和子などの名は多くの人に知られている。だが、これらの人々を遙かに超える数の注目すべき作者らがい、その中には日本人以外の人々もいた。一例をあげれば、数年前に亡くなったが、一九二三年に韓国に生まれ、

二〇歳のとき夫を追って渡日、二人の子を産んだのち発症し、以後ずっと栗生楽泉園で暮らした、日本名香山末子さんのような人もいる。異国語（日本語）で口述する彼女の詩が、どれほど豊かな情感に支えられているか、この『ハンセン病文学全集』を見る人は、驚きをもって確かめるだろう」と記している。

では、香山末子の選詩集『エプロンのうた』（皓星社、二〇〇二年）から、まっすぐで、向日的な感性に貫かれた作品を紹介する。

#### 手に太陽

手に太陽をいっばい

光ってまぶしい

指の間から膝に落ち座布団に落ち畳に落ちて

上からだんだん落ちていった太陽

畳の目の間から太陽が光って

細かく壊れて

また光る

そんな太陽

いつ見たか忘れたな

盲目のため、口述筆記を通して書き続けられた末子の作品世界をどう位置つけるか。

私は、「香山末子の全作品は、希にみる痛切な美しさに満ちて光っている。日本のライ詩史上はむろんのことであるが、これは日本語で書かれたもうひとつの韓国詩史上の宝石でもある」と同詩集の「序にかえて」に記した。

もう一人の在日、韓億洙<sup>ハンオクス</sup>は、一九二七年生まれ、七十五歳。第一詩集『恨<sup>ハム</sup>』（土曜美術社出版販売、二〇〇二年）から、日韓の狭間を生きてきたその背景にそれとなく触れた傑作を紹介する。

#### 風来坊先生

どこからなにしに來なされたのか

風来坊の李先生

人はみな

コンダリ<sup>\*</sup>の李と呼んではいたが

出自の程は知る人もなかった

北陸の海辺の

ひなびた他人の町で

ひるまは乗合自動車の車掌さん

よるは寓居で

ハンゲル夜学教室の先生

ぼくが八歳のとき

初めて出会ったハンゲル※

言葉も文字も自由が無い頃

幼友達と一しよに

ほの暗い灯火の下で

息づかいひそめながら学んだ東の間の一年

六十五年すぎて振り向けば

それはまぼろしの出来事だったか

ぼくが今

国の言葉を読み

鳥が南を訪ねる頃

ふるさとの弟がよこす

出来秋の便りを見ることが叶うのも

李先生のたまもの

夜が明けて光りが復かえり

ぼくたちに一粒のシアル※を置土産に

先生は風來の旅を終り

北のふるさとお帰りなさつたと

風のたよりに聞く

※コンダリ 風来坊

※ハンゲル 韓国文字

※シアル 種、実

私は、「解説」で、「詩人・韓億洙の内部にある望郷の激しさは、現実の分断された朝鮮を対象にして燃え立っているのではない。民族の原郷としての朝鮮なのだ。失われた、ただし、イメージの中にすでに実現している朝鮮なのだ。ここに在日の架橋への意志がある」と記した。

日韓の複雑な関係史を考慮する時、在日のハンセン病者の詩をどう位置付けるか、重要な課題である。その場合、「日本語で書かれた韓国詩」、そして「日韓を架橋する意志」は、キー・ポイントになるはずである。

## 七、終わりに

日韓ハンセン病詩の研究は、純粋な比較文学研究からは、はみ出さざるをえないだろう。二ですでに指摘したように、韓何雲自身、日本への留学生であったが、日本文学を専攻したわけではない。一九四五年まで、朝鮮からの留学生中、日本文学を専攻者は、四名しかいない。しかも女性のみであった。が、韓何雲は、日本詩から学んでいる。この一例からも推測できるのだが、複雑に絡み合った日韓の歴史を十分踏まえて、今後の研究を進めていきたい。

後註

- ① <http://my.netian.com/~chamkil/main/sorok/sorok.html>
- ② 同右
- ③ 金東里他編『現代韓国文学選集―5 詩集』(一九七六、冬樹社) 一八三頁
- ④ 姜晶中訳『韓国現代詩集』(一九八七、土曜美術社) 一八一頁
- ⑤ 『詩と思想 韓国詩と思想の背景』(一九八八、八月号、土曜美術社) 一一六頁
- ⑥ 滝尾英二著『朝鮮ハンセン病史 日本植民地下の小鹿島』(二〇〇一、未来社) 二五頁
- ⑦ 金東里他編『現代韓国文学選集―5 詩集』(一九七六、冬樹社) 一八六頁
- ⑧ 白石昭彦(「朝日新聞社」編集局) 氏の示唆による